H・B・ストウの『アンクル・トムの小屋』におけるエヴァのキリスト教について

森田　美千代

1．はじめに

本稿の目的は、H・B・ストウ（Harriet Beecher Stowe, 1811—96）によって一八五二年に書かれた『アンクル・トムの小屋（*Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*）』[1]において、エヴァがどのようなキリスト者として描かれているかを、テキストにできるだけ忠実にみていくこと、そしてそのことを通して、エヴァのキリスト教の特徴を抽出すること、である。加えて、以上の作業を通して、アン・ダグラス（Ann Douglas）とジェイン・P・トンプキンズ（Jane P. Tompkins）のエヴァ解釈が妥当であるかどうかも、明らかにしたい。

2．エヴァはどのようなキリスト者として描かれているか

（一）エヴァが『アンクル・トムの小屋』の小説において、はじめて登場するのは、第一四章「エヴァンジェリン」

の章である。[2] エヴァが小説から消えるのは、説明を要する。エヴァは第二六章で死ぬ。しかし、第二七章はエヴァの葬式が描かれ、第二八章はその余韻が残る。そのかなりあとの第三一章と第三二章（第三二章では夢として）で、再び登場する。エヴァは、エヴァンジェリンの通称で、エヴァンジェリンのもとの意味は、「福音をもたらす者」である。[3] エヴァは、五ないし六歳の少女である。[4]「一点の染みや汚れも身につけていないかのように、いつも白い服を着ていた」（一二六、一七八―一七九）。また、「バラ色の口もとにいつもかすかな笑み（a half smile）[5] を浮かべていた」（一二六、一七八）。

エヴァがいつも白い服を着ていたということの意味は何か。キリスト教においては、白は、「聖」なる色である。たとえば、小説のなかでエヴァが好きだとされているヨハネの黙示録では、白は、「全き純潔・清浄と、不滅の栄光とを象徴する」と、いわれている。[6] 加えて、小説でエヴァが白を着ている少女として登場しているのは、エヴァが白人を代表している人物として描かれているためであることはまちがいないことであるといえよう。のちほど出てくるトプシーが黒人を代表する人物（少女）として描かれているのと対照的である。

（二）アンクル・トムは、エヴァを、「天使の一人が新約聖書から出てきたのではないか」と信じたほどだった（一二七、一七九）。トムは、エヴァを天使のような存在としてみている。天使のような存在とは、どういう存在か。「天使は送り主である神の権威をもつと信じられ、その出現はしばしば神自身の現臨と区別しがたい。その働きは、神の意志を伝えあるいは行なうことで、人間を保護し、指導し、刑罰を与える」。[7] ここでは、天使の働きが神の意志を伝えあるいは行なうことで、人間を指導するということに、注目したい。エヴァは、恐らく意識せずに、神の意志を伝えあるいは行なって、黒人の召し使いたちを導き、変えていった。エヴァは、そういう意味での天使のよ

うな存在であった。特に亡くなる直前のエヴァはそうであったといえよう。

（三）トムのほうから、エヴァの名前を尋ねている。その直後、エヴァがバランスを崩し、船からまっさかさまに川（ミシシッピ川）に落ちた。その瞬間、トムは、川に飛び込み、エヴァを救助した。

（四）エヴァは、父親のオーガスティンに、トムを「買って」くれるようにたのむ。エヴァでさえ、トムをあたかも「物」であるかのように、彼を「購買」の対象にしている。そして、そのことに何の疑問も感じずに、至極当然のことのように思っていることがわかる。

父オーガスティンに理由を訊かれたエヴァは、「トムをしあわせにしてあげたい」からだと答える（一三〇、一八三）。このエヴァの答えは、とっぴで奇妙である。想定外の答えといわざるをえない。

エヴァのこの奇妙な答えは、のちほど、父オーガスティンに、黒人召し使いのいない暮らしと、黒人召し使いを家中いっぱい抱えて暮らすのとどちらがいいかと尋ねられたときのエヴァの応答につながっていく。エヴァの答えは、「黒人召し使いを家中いっぱい抱えて暮らすのがいい。それは、自分のまわりに愛さなければならない者をたくさんつくってくれるから」というものであった（一六〇、二二二）。これも、奇妙な答えである。

総じて、（四）が醸し出すエヴァは、五ないし六歳の平凡な少女ではない。どこか奇想天外な発想をする少女である。

（五）ニューオーリンズの我が家に到着したエヴァは、母親ばかりでなく、「ばあや」（エヴァの母親マリーが結

婚したとき、自分の「財産」として実家から連れてきた黒人召し使い）や他の黒人召し使いに、キスをしたり抱きついたり握手をしたりした。エヴァのこの行為、すなわち、キスをしたり抱きついたり握手をしたりして、黒人召し使いと体を触れることは、エヴァにとっては至極自然なことであったが、エヴァの養育係としてニューイングランドから一緒にやってきたオフィーリアにとっては、驚くべきことであり、不愉快なことであった。奴隷制の南部の日常生活ではごく自然に白人と黒人奴隷が体を接触しているのに対して、奴隷制反対の北部人であるオフィーリアは、黒人奴隷と体を接触させることなど、生理的にできないのである。この矛盾を、オフィーリアは、南部人の奴隷主であり、エヴァの父であるオーガスティンによって、のちほど指摘されることになる。

（六）日曜日の朝、教会の礼拝には行かない父オーガスティンに、なぜ教会に行くのかと逆に尋ねられたエヴァは、「神様はわたしたちをご自分のものにしたいのですって（God wants to have us.）。神様はわたしたちにすべてを与えてくださるのですって。だから神様がわたしたちにそうしてほしいのなら、そうするのはたいしたことでもないわ」（一五七、二一八）と、答えている。神様はわたしたちを自分のものにしたいと思っているというエヴァのこの答えも奇妙であり、わかりにくい。ただし、神はわたしたちを自分のものにしたいと思っているというここでのエヴァのせりふと、「あなたはわたしのもの（Thou art MINE.）」というイザヤ書第四三章一節の聖書のことばをかつてエヴァがトムに読んで聞かせ、そのことばがトムに聞こえてきたこと（『アンクル・トムの小屋』第三一章）が、符合していることを鑑みると、神がわたしたちを自分のものにしたいと思っているというエヴァ（ストウといってもよい）の答えは、奇妙であるどころか、エヴァ（ストウ）の思想の一端をしっかりと伝えているものであるともいえる。

エヴァは、母親と同じ聖公会の教会礼拝に出席したり（一五七、二一八）、オフィーリアと一緒に「小規模のメソジスト派の礼拝集会所に出席したりした」（二四二、三三一）。しかし、いつ、どこで、（幼児）洗礼を授けられて、どこの教会員であったかは、わからない。

（七）キリスト教に関する、エヴァとトムとの関わりは、トムがエヴァのために黒人霊歌や賛美歌を歌ってあげ、エヴァが聖書を読んであげ、その聖書の意味をトムが説明してあげるというようにして、進んでいった（一六〇、二二二）。

（八）最初のころ、エヴァはトムを喜ばせるために聖書を読んでいたが、次第に聖書そのものを愛するようになった（二二四、三〇八）。

聖書のなかでエヴァが最も気に入っていたのは、黙示録と預言書であった（二二四、三〇八）。すなわち、ヨハネの黙示録と、イザヤ書である。黙示録はこの直後に出てくるが、預言書のイザヤ書は、『アンクル・トムの小屋』の最後の部分で二度出てくる。一度目は第三一章で、二度目は第三二章である。特に第三二章では、トムの夢にエヴァが現われ、そのエヴァがイザヤ書のことばで、トムを勇気づけるのである。イザヤ書のこの二箇所については、後述する。

（九）エヴァはトムとともに、ポンチャートレーン湖畔（ルイジアナ州ニューオーリンズ市北部にある湖畔）の別荘で、日曜日の夕暮れ、庭園の四阿の苔むした小さな椅子に座っていた。エヴァは、ひざの上に聖書を広げ、黙

示録の一節を声に出して読みあげた。「わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た」（ヨハネの黙示録第一五章二節）、そして、「あの雲を見て！　大きな真珠の門みたいでしょう」（ヨハネの黙示録第二一章二一節）と言い、さらに、「その向こうも見えるわ、ずっとずっと遠くまで。全部が黄金色をしているわ」（二二七、三一〇）と言った。

「エヴァは、その小さな手を空に向けて差し出した。（中略）エヴァの目は、真剣に空の彼方に向けられていた」（二二七、三一一）。そして、エヴァは、「あそこに行くわ。輝かしき精霊［ママ］のところよ。わたしはもうすぐ行くことになるの」と言った（二二七、三一一）。

「エヴァは、自分が赴こうとしているのは、イエスのもとであり、イエスの住む家なのである、と言った」（二三九、三二六）。「救い主キリストの家。そこはとても安らかで平和で、すべてが愛に満ち溢れている！」と、「まるで何度も訪れたことのある場所みたいに語った」（二四二、三三〇）。

エヴァがなぜ黙示録を気に入ったのか、ストウは、小説のなかで説明していない。ただ端的に、ヨハネの黙示録第一五章二節と、ヨハネの黙示録第二一章二一節を差し出している。

ヨハネの黙示録第一五章二節「わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た」の「火」には、「破壊と精錬」の両義性があり、また「ガラスの海」とは、「神の玉座の前に広がる平面」を指し、「そこで殉教者たちはことほぎ歌う」[8]。また、「ガラスの海」は、「高貴、清澄、無尽蔵など、積極的な意味を表現するシンボルである」[9]。

ヨハネの黙示録第二一章二一節「また、一二の門は一二の真珠であって、どの門もそれぞれ一個の真珠でできていた」の「真珠」は、「新しいエルサレムの門の美の象徴である」[10]。

ヨハネの黙示録第一五章二節とヨハネの黙示録第二一章二一節のどちらの場合も、エヴァがこれから行く（死後

行く)ことになる、救い主イエス・キリストの住むところ、そしてそこは清澄で美しいところであるということを、指し示しているといえる。

(一〇)ある日突然、エヴァは、母親のマリーに、「自由州で土地を買って」、黒人の召し使いたちを連れて行って、そこで、「自分で聖書を読むことや、自分で手紙を書くことや、自分宛てに来た手紙を読むことを教えたい」と、言った(二三〇、三一四)。

「エヴァは、奴隷たちが、読み書きができないために、聖書を読めないことを嘆く。聖書を読めなければキリストの教えに接することができないために、魂が救われないのではないかと危惧するのである[11]」。

これは、七ないし八歳の少女にしては、驚くほどリアリスティックな発想ではないか。エヴァがこの直後に亡くならないで、もう少しこの世に生きていれば、実際にやり遂げていたかもしれない。いや、恐らくやり遂げていたであろうと予感させる。このことからも、後述することになるアン・ダグラスのエヴァに対する見方がまったく妥当性を欠くものであることがわかる。

(一一) 黒人召し使いたちのおかれている社会の悪弊[奴隷制のこと]に関連して、エヴァは言う。「わたしが死ぬことでこの悲しみを終わらせることができるのなら、わたしは喜んで死にたい。わたしはあの人たちのために死んでもいい」(二四〇、三二七)。エヴァの、この犠牲のせりふは、第五章ですでに出てきたトムの犠牲のせりふと、通じるものがある[12]。また、エヴァのこの犠牲のせりふは、イエス・キリストがわたしたち人間のために犠牲の死を遂げられたことと相通じるものがある。

（一二）また、エヴァは、次のようにも言う。父オーガスティンがエヴァを愛するのと同じように、プルー（奴隷制のために我が子を死なせることになり、子どもが亡くなってから、自分も死んで、白人が行かない地獄のほうに行きたいと言っていた老婆）だって、ばあやだって、トムだって、自分の子どもを愛している。そのことをわかってほしいと、言う（二四一、三三〇）。

（一三）オーガスティンが、トプシーという八ないし九歳の黒人の少女を買ってきた。セント・クレア家で、トプシーは、盗みを働いた（二八四、二九三）。また、オフィーリアのボンネットの縁飾りを切り刻むなどのいたずらをした（二四三、三三二）。

「ああ、トプシー、かわいそうな子、わたしがあなたを愛しているわ！　そう言うと、エヴァは、（中略）彼女の小さい、やせた白い手をトプシーの肩の上に置いた。（中略）そのとき、トプシーの、大粒の、輝く涙が、エヴァの小さな白い手にこぼれ落ちた」（二四五、三三五）。このことを、ストウは、次のように言っている。「この瞬間に、本物の信仰の光、天上の愛の光が、トプシーの不信心な魂の暗闇を刺し貫いたのだ！」（二四五、三三五）。

（一四）エヴァは、自分の死期を予感して、屋敷の黒人召し使いたちを自分の部屋に呼び、次のように言う。「わたしがあなたたちに覚えていてほしいのは、イエス様のおられる美しい世界があるってことなの。わたしはそこへ行くわ。あなたたちもそこへ行けるのよ。（中略）でも行きたいと思ったら、（中略）キリスト教徒でなければならないの。（中略）キリスト教徒になろうと望めば、イエス様が助けてくださるの。イエス様にお祈りをして、聖書を読むべきなの」（二五一、三四二）。「イエス様に助けてくださいってお願いするのよ。それから機会があればい

つでも人に聖書を読んでもらいなさい。そうすれば、わたしはあなたたちと天国で会えると思うわ」（二五一、三四二―四三）。

（一五）エヴァはそれから、父オーガスティンに向かって、キリスト教徒でしょうと尋ねる。逆に、オーガスティンから、キリスト教徒であるということはどういうことかと尋ねられる。エヴァは、「何にもましてイエス様を愛することだ」と答えている（二五三、三四五）。

（一六）エヴァの死の瞬間が訪れた。エヴァの大きな青い目が開き、微笑み（smile）が顔に広がった（二五七、三四九）。輝かしい栄光に満ちた微笑み（smile）がエヴァの顔に浮かぶと、彼女は「ああ！　愛、喜び、安らぎ！（"O! love, —joy, —peace!"）」と言い、「死を越えて永遠の生へと去っていった」（二五七、三五〇）。このところを、ジェーン・トンプキンズは、エヴァが「死から生命へ」と進み入る瞬間の叫びは、天国をまのあたりに見て死ぬ叫びなのだ、と言っている[13]。

（一七）別荘の庭の隅に、すなわち、「トムとエヴァが腰掛け、話し、歌い、しばしば聖書を読んだりした苔むした椅子のそばに、小さな墓が作られた」（二六〇、三五四）。聖書が読まれた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる」（ヨハネによる福音書第一一章二五―二六節）。エヴァの葬りのときに読まれた、ラザロ復活の、この聖書の箇所を、のちほど、トムは、オーガスティンに懇願して読んでもらう（二六三、三五七）。

（一八）エヴァの死は、残された者たちに、どのような変化をもたらしたか。オーガスティンは、聖書を真剣に読み始めた（二六五、三六一）。トムを解放するに必要な手続きを始めた（二六五、三六一）。オフィーリアも、「以前にも増して、トプシーの教育に熱を入れた」（二六六、三六三）。トプシーも、変化をとげ始めた（二六七、三六三）。

（一九）最後にエヴァが小説のなかで出てくるのは、トムが、農園主であり奴隷所有者であるサイモン・レグリーに買われて、レグリー農園に行くべく、レッド川（ルイジアナ州内でミシシッピ川に流入している川）を航行している船に乗っているときである。これが一度目である。小説の第三一章である。「かつてエヴァが読んで聞かせた古い預言書のなかのことばが聞こえてきた」。「恐れるな！　わたしはあなたを購う（redeem）。わたしはあなたの名を呼ぶ。あなたはわたしのもの！（Thou art MINE!）」（イザヤ書第四三章一節）と。このことを通して、エヴァが生前、預言書のイザヤ書を好んでいたということがわかる。前述した（八）が、ここで繋がるのである。

二度目は、レグリー農園の奴隷居住区内の掘立小屋に連れて来られた最初の夜に、トムの夢に現われたときである。小説の第三二章である。長いが、以下に引用する。

「夢のなかで、優しい声が彼［トム］の耳にとどいた。彼は、ポンチャートレーン湖畔にある庭園の苔むしたベンチに座っていた。エヴァが真剣なまなざしを下に向け、彼のために聖書を読んでいた。彼には彼女の読む声が聞こえてきた。

『水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の

中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしは主、あなたの神、イスラエルの聖なる神、あなたの救い主』（イザヤ書第四三章二―三節）。

それらの言葉は徐々に溶けて消えていき、まるで神聖な音楽のなかへと入り込んでいくかのように思われた。少女が底深い眼をあげ、彼をいとしげにじっと見た。すると暖かく、心地よい光が、その目から彼の心に差し込んでくるような気がした。それから、まるで音楽に乗って漂っているかのように、彼女が輝く翼で上っていくように見えた。翼からは、きらきら光る金の粉が星のように落ちてきた。そして、彼女はいなくなった。

トムは目を覚ました。あれは夢だったのか？　夢だったとしておこう。けれど、生きているとき、苦しんでいる者を慰め、励ますことをあれほど熱心に望んでいたあの幼く愛らしい魂が、死後この役割を引き受けることを神に禁じられているなどと、いったい誰に言いえようか？」（三〇三、四一〇）。

死後も、天にあってエヴァは、この地上にいる苦しめる者を、なぐさめ励ましている。これは、エヴァというよりもストウが、自らのキリスト教信仰告白（キリスト者は、生きているときこの世においてのみならず、死んでも天において、この世で苦しめる者をなぐさめ励ますことができるという信仰告白）をしているものと理解するのがふさわしいかもしれない。

（二〇）ストウは、最後に出典不明の詩を付け加えている。「信ずることは素晴らしい、わたしたちの頭上には、天使の翼に乗って、漂う死者の魂がある」（三〇三、四一一）。

3．エヴァのキリスト教の特徴はどのようなものか

これまで、エヴァがどのようなキリスト者として描かれているかをみてきた。そのことをもとにして、エヴァのキリスト教の特徴を考えてみたいが、その前に、別稿[14]で筆者は、父オーガスティンとの関わりで浮かびあがってくるエヴァのキリスト教の特徴を、以下のように述べた。

「エヴァは、天性的に宗教的な人間（少女）として、小説に登場している。エヴァは、聖書にひきつけられているが、そのなかでも特に黙示録と預言書にひきつけられている。エヴァは、キリスト者とは、『イエス様を愛する人である』ときっぱり言い切っている[15]」。

本稿であらたに加えることができる、エヴァのキリスト教の特徴は、少なくとも二つあるといえよう。一つめは、主として（一一）でみたように、「犠牲の死」をエヴァが受け入れたいと思っていることである。エヴァは、自分が死ぬことで黒人たちの置かれている苦しみや悲しみを終わらせることができるのなら、喜んで黒人たちのために自分が死んでもいいと、言っているのである。

二つめは、主として（一〇）、（一四）、（一八）でみたように、エヴァのキリスト教の特徴は、ダイナミックで、プラグマティックで、リアリスティックであるということである。これは、筆者にとって、今回の研究における新しい発見だった。

4. アン・ダグラスとジェーン・トンプキンズのエヴァ解釈は妥当であるか

アン・ダグラスのエヴァ解釈は、妥当であるか。ダグラスは、「エヴァの死は本質的に装飾的（decorative）である」[16]といっている。また、「エヴァは実際には誰も回心（convert）させていない」[17]ともいっている。

そういうことはない。エヴァのキリスト教の特徴のところでも述べたように、エヴァは、愛によって、人を変える力や事態を動かす力をもっていた。驚くほど、ダイナミックで、プラグマティックで、リアリスティックな信仰をもっていた。

文学者・中村千鶴は、次のように言う。「約二年におよぶセント・クレア家での滞在中に、トプシーが生まれて初めて本心から悲しむ出来事がエヴァの死である。最後の別れに形見にもらった金髪と彼女の遺言でトプシーは、ほんとうの愛の意味を知る。（中略）またオフィーリアも最初に黒人に抱いていた偏見を反省し、二人は最終的にほんとうの信頼に結ばれた関係を築いている。オフィーリアの機転で彼女の奴隷になった後に解放され、最後には敬虔なキリスト教徒になって神の国に仕える」[18]。このことだけをとってみても、ダグラスのエヴァ解釈は、修正されなければならない。

ジェーン・トンプキンズのエヴァ解釈はどうであろうか。彼女は言う。「感傷主義への反対論はすべて、この挿話［少女エヴァの死］がお涙頂戴物語にほかならぬ、という信念に基づいている。小さいエヴァの死の場面には他のあらゆる感傷物語と同様に感情が溢れているが、その悲嘆の対象である弊害を是正するためになんの手も打たれない、と反対論は論じるのだ。本質的には、それは奴隷制や他の人物たちを以前のままに放置する、というのであ

る」[19]。このような立場に与しないトンプキンズは、「死者や臨終の人々には罪深い者たちを贖う力がある」[20]。つまり、少女エヴァの人生および彼女の死に、他の人たちを変える力があることを、トンプキンズはみているのである。トンプキンズのエヴァ解釈は妥当である。筆者は、トンプキンズのエヴァ解釈を是とする。

5．おわりに

本稿の目的で述べたように、これまでのところで、エヴァがどのようなキリスト者として描かれているかをみて、エヴァのキリスト教の特徴を抽出した。加えて、ダグラスとトンプキンズのエヴァ解釈の妥当性を検討した。

最後に、筆者の違和感を記して、本稿を閉じることにしたい。それは、（四）で述べたように、父オーガスティンにトムを購入したい理由をエヴァが尋ねられたときに、彼女が、トムをしあわせにしてあげたいからだと、答えたことである。なんのためらいもなく、きっぱりとそのように答えている。恐らく自覚せずしてそのように言っているエヴァに、筆者は違和感を覚えるのである。また、自分のまわりに愛さなければならない人たちをたくさんつくってくれるから、黒人召し使いを家中にたくさん抱えて暮らすのがいいとも言っている。この答えにも違和感がある。

エヴァに対する以上の二つの違和感は、正確にいえば、エヴァに対する違和感というよりも、作者ストウに覚える筆者の違和感であるといったほうがよい。

注

(1) 本稿の英語テキストとしては、Elizabeth Ammons 編の *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly* を用いる。日本語訳は、主として、一九九八年に明石書店から出版された小林憲二監訳を用いる。しかし、場合によって、拙訳を用いている部分もあるし、一九六七年に旺文社文庫として出版された大橋吉之輔訳、一九六六年に角川文庫として出版された山屋三郎・大久保博訳、一九五二年に新潮文庫として出版された吉田健一訳を用いている部分もある。引用は、本文中に、英語の頁数と日本語の頁数の順序で示す。訳者名を特に明記していない場合は、小林監訳である。

(2) 父オーガスティン・セント・クレアも、はじめて小説に登場するのはエヴァと同じく、第一四章である。

(3) 類語として、evangel, evangelical, evangelism, evangelist などがある。

(4) エヴァが、小説に登場するのは、五ないし六歳から七ないし八歳までの二年間だけである。

(5) 笑み・微笑みは、エヴァやトムをあらわすキー・ワードの一つである。

(6) マンフレート・ルルカー『聖書象徴事典』池田紘一訳、人文書院、一九八八年、二〇三頁。

(7) 新教出版社編『聖書辞典』新教出版社、一九六八年、三一八頁。

(8) レオンハルト・ロスト、ボ・ライケ原著編集代表『旧約新約聖書大事典』荒井献・石田友雄日本語版編集代表、教文館、一九八九年、三三〇頁、九七五頁。

(9) 『新共同訳　新約聖書註解　II』日本基督教団出版局、一九九一年、五〇〇頁。

(10) 新教出版社編『聖書辞典』新教出版社、一九六八年、二四三頁。

(11) 藤井久仁子「『アンクル・トムの小屋』と家庭小説」『「アンクル・トムの小屋」を読む―反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃―』高野フミ編、彩流社、二〇〇七年、一六一頁。

(12) トムは言っている。「もしおらが売られるか、それともこのお屋敷のすべての者が売られて、何もかもがメチャクチャになってしまうかだったら、おらが売られていく。(中略) このお屋敷のみんながばらばらになって売られていくくらいなら、おら一人が売られていったほうがましだ」(三四、五七)。

(13) Jane P. Tompkins, "Sentimental Power: *Uncle Tom's Cabin* and the Politics of Literary History," in *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, ed. Elaine Showalter (New York: Pantheon Books, 1985), 87; ジェイ

ン・P・トンプキンズ「感傷の力―『アンクル・トムの小屋』と文学史の政治学―」『新フェミニズム批評―女性・文学・理論―』青山誠子訳、岩波書店、九三頁。

(14) 森田美千代「H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガスティン・セント・クレアのキリスト教について」『キリスト教と諸学』二九号、聖学院キリスト教センター、二〇一五年。

(15) 同上、一六六頁。

(16) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Doubleday, 1977), 4.

(17) Ibid., 4.

(18) 中村千鶴「『アンクル・トムの小屋』におけるユーモア」『「アンクル・トムの小屋」を読む―反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃―』高野フミ編、彩流社、二〇〇七年、一三七頁。

(19) Tompkins, 85; 青山訳、九〇頁。

(20) Ibid., 86; 同上、九一頁。